チャールズ・ライト・ミルズによるミード思想の解釈

動機論からの他者論へ向けて

高田　正哉

1．本論文の目的

本論文は、チャールズ・ライト・ミルズの初期論文におけるジョージ・ハーバート・ミードの位置づけを明らかにすることによって、ミルズの思想の中心となる「言葉によって他者とともに生きる」という思想のあり方を考察する。

先行研究においてミルズの動機論は、シンボリック相互行為論の立場に立つ社会学者のランダール・ストークス＝ジョン・P・ヒューイット、および社会構築主義の立場に立つ社会学者のジョン・I・キッセ＝マルコル・スペクターによって示されている。

ストークスらは、「何らかの問題状況に直面した意味のある相互行為を修復し保証する言語的行為、（中略）、そして動機を語るといった一連の活動」[1] という、「調整活動」（aligning action）について論じている。ストークスらが論じた「調整活動」とは、ある社会の秩序を、言葉によって再び共通了解を作ることで、修復することである。また、ミルズの動機論は社会構築主義の立場の研究者であるキッセらからも研究されている。キッセらはミルズの動機論を、価値の組み換えのための「クレイム申し立て」（claim-making activities）であると解釈する。キッセらは「道徳的立場を擁護し、価値判断に基づいて主張し、義憤や憤激を表出することが、通常、クレイムへの裏づけとして行われる」[2] と述べる。キッセらは、ある行為が社会的な規範に違反していると申し立てることによって、社会的秩序の修復がはじまるとみている。これらの研究動向を踏まえて井上俊は、先行研究について「普通の人々が行為者あるいは（非専門的な）観察者として、日常的な状況の中で生じるさまざまの行為に『類型的なボキャブラリー』（つまり常識的な意味連関を示す既成の語彙）を用いて動機を付与しあいながら相互作用を営んでいる側面に目を向けた」[3] と説明する。いずれの先行研究も、ミルズの社会心理学の業績を、言語による社会秩序の再構築のあり方を捉えたものであると解釈している。

だが、ミルズの社会心理学は社会秩序の再構成にのみ見ていたのであろうか。ミルズは「行為や言語を、（中略）社会的に状況づけられた動機の布置と規範的な行為とから成る、いくつかの類型的な枠の中に、いろいろな型の行為を位置づけることこそ、ま

さしく、われわれの研究の課題である」[4] と述べる。ここでミルズが述べることとは、動機によって社会の中に自己の行為のあり方を合わせていくさまを見ていくという考えである。井上は「その統制力は結局のところ、私たちがそれによって他者を解釈するように、他者もまたそれによって私たちを解釈するという事実に基礎づけられている」[5] と述べる。動機とは、自己・他者の行為を制御し、秩序の安定化を図るばかりでなく、自己が他者という存在を踏まえて行為するための基盤となるものなのである。

このミルズの視点は、ミードの社会心理学の受容によって成り立つ。アルバス＝アルバスは、「彼（ミルズのこと、筆者注）の主要な貢献とは、社会学の世界に動機という用語を紹介しえたこと、その用語をミード研究者の相互行為論者の視点から広げえたこと（そこでは“I”よりも“me”がより強調されるよう位置づけられている）、そして経験調査の視点を示しえたことにある」[6] と述べる。ここで重要なのは、ミルズがミードの「相互行為」という考え方からその動機論を形作ったことである。このミードの相互行為という視点は、個々人の行為のあり方を、自己と他者との関わりという社会的な事実から分析することを可能にするものである。

以上のことを踏まえて本論文では、ミルズがミードのどのように受容したのか、ミードの学説とミルズの学説の比較検討をすることを通して明らかにしていく。そのことから、ミルズが動機論によって「言葉によっていかに他者とともに生きるか」という思想について論じようとしていたことを示す。

2．ミードの社会心理学とミルズ

2-1 ミードの「生理学的心理学」と「社会心理学」の区別

ミルズは、相互行為という視点に基づいた論文を、その初期論文において多く著している。ミルズの初期論文とは、第二次世界大戦以前の、主にプラグマティズムの知見を用いながら言語と社会の関係を考察したもののことである。具体的には、「言語・論理、文化」（“Language, Logic, and Culture”, 1938）、「状況化された行為と動機のボキャブラリー」（“Situated action and Vocabularies of Motive”, 1940）などである。これらの著作について、ミルズの思想研究を行うアーヴィング・ロイス・ホロヴィッツは、「おそらくミルズに最も重要な影響を与えたものは、客観的な社会的視点との関係としての自己としてのみ見る、ミードの強力な社会学的な考え方である」[7] と説明する。ここでホロヴィッツが強調するのが、ミルズが社会的視点から自己を分析したという事実である。つまりミルズは、自己という問題を、自己が社会の中で他者とともに生

きるという社会的な事実から考えようとするのである。だが、なぜミルズは「社会的視点」、すなわち他者とともに生きるということから自己を眺めようとするのか。

ミルズのミード受容は、この時代の指導教員との関係にあるが、その中で特に重要なのがミードの社会心理学の考え方である[8]。ミルズが引用するミードの論文として、「生理学的心理学と対になる学としての社会心理学」(“Social Psychology as Counterpart to Physiological Psychology”, 1909)が挙げられる。この論文は、ミードが自身の社会心理学の立場を表明した初期の論文として知られているものである。具体的な影響関係は後述するが、この論文でミルズがミードの議論で注目するものとして、ミードによる生理的心理学(physiological psychology)と社会心理学(social psychology)の区別がある。

> 社会集団や、その諸対象や、その諸々の相互関係や、その諸自我といったものを、私たちの反省的意識や自我意識の前提条件として提示し分析するためには、社会科学に頼らねばならないということ、そしてこのことは、私たちの物理的意識の前提条件である物理的複合体を提示し分析するためには、生理学的科学に頼らねばならないのと同様であるということである。換言すれば、社会心理学は、生理心理学と対になる学なのである。

ミードの社会心理学は、行為をパブロフのような刺激-反応モデルに代表される生理的な側面でなく、社会的な側面、すなわち自己と他者との相互行為から説明するものである。このことについて、ミードの思想研究の第一人者であるグレイ・クックは「時にミードは、人間という種あるいは人間諸個人の社会的経験の中から言語・思考・自己意識の発生を説明するために、人間の社会的行為(human social conduct)の考えを用いている」[10] と述べる。ミードは社会心理学を人間の社会的行為を説明するためのものと定義しているが、その意図とは個々人が社会の中における他者との関わりから経験の意味を捉えるということである。ミードにとって社会心理学とは、自己と他者とが関わる世界、すなわち自己を中心とした相互行為の世界を捉える試みであるといえよう。

ミルズは、このミードの知見について「社会過程が決定要因としていかに思考のなかに入り込むかを示すのに用いることができよう」[11] と述べる。ミルズにとってミードの社会心理学とは、社会のあり方から個々人の思考や行為のあり方、ひいては自己

と他者とが相互行為する世界を解明しようとする試みなのである。そしてミルズは、このミードの知見に立って研究するのである。

2-2 ミードの“I”と“me”の概念

ミルズはミードの社会心理学の方法を引き継いでその研究を進めた。では、ミルズはミードの思想のどの部分を引き継いだのか。ミルズが引き継いだものとして、ミードの社会心理学の主要な概念である、“I”と“me”の概念がある。だが、その概念とはいったいどのようなものなのであろうか。

ミードの述べる“me”の概念とは、「自分自身を、他者に対して働きかけるものとして表現する」[12] というものである。それに対してミードの述べる“I”の概念とは、「自分自身に対して働きかける自我についての記憶イメージ」[13] である。自己は、他者から受ける態度に基づいて、それに応えるための適切な態度を決める。その時に自己は、過去の自己を参照して、どのように振る舞うべきかを考える。これについて、ミードの思想を研究するミッチェル・アボラフィアは、「“I”とは他者の態度への有機体の反応であり、“me”とは彼自身で仮定した他者の態度が組織化された一連のものである」[14] と説明する。自己は、“I”の部分によって他者の態度に反応し、その意味を自分が取ってきた一連の態度である“me”から解釈し、他者への適切に応答しようとする。このような自己の行為のあり方の図式を示したのが、“I”と“me”の概念である。

ミードの“I”と“me”の視点で重要なのは、自己とは自己自身の生理的な欲求でなく、社会の中で他者とともに生きること、すなわち自己と他者との相互行為から考えるという視点を示したことである。

> しかし、私たちはそのことを、私たちの思考が会話をしている他の聴衆へ向かってなしているのであって、そうする以外に私たち以外に私たちはそのことをなしえないのである。そして、たとえこの自我が、実際に思考しているIやmeだけであったとしても、これらの主役の背後には、他者たちが立っているのであって、この合唱団に向かって私たちは、私たちの推論を、言葉として口に出して、また印刷されたページによって試演するのである。[15]

ここでミードが述べることとは、自己が自らの行為を考える際には、必ず他者の存在が想定されているという事実である。つまり、自己は他者からの期待に即して、そ

の行為を決めるのである。そのことを踏まえて船津衛は、「人間の内的、主体的側面をシンボルを通じての相互作用との関連において明らかにしようとしている」[16] と述べる。人間の行為は、他者から受ける期待を予期して行われるという点で、動物の行為とは異なる。ミードにとって重要なのは、人間のみが言葉を有し、言葉を用いて他者と相互行為する欲求を持つということである。そのことによって、他者の考えや期待をあらかじめ予期し、行為することができるというのが、ミードの主張である。それゆえ、「社会的意識の客観的諸条件を規定するためには、人間社会の起源を記述し・説明する進化論的社会科学、および社会的成長や社会的組織化の法則とは何かを最終的に規定する社会諸科学が必要不可欠」[17] なのである。この意味で、ミードは、人間が他者との相互理解という社会的な欲求を持ち、その中から相互行為するという視点を持っていたといえよう。

このことを踏まえてミルズは、「動機に対するこのような社会学的理解（言葉によって行為が統制されるという理解、筆者注）は、動機をもって、ある限定された状況の比較的安定した言語的表現とみなすものであり、行為に対して、その外部から、社会的にアプローチしようというミードの主張と、まったく一致している」[18] と述べる。ミルズは、ある行為が社会的な状況に即して決められるという視点を有している。その行為は、必ず他者との相互行為が前提とされている。その意味でミルズは、行為が他者という想定があるという点で、ミードの思想を色濃く引き継いでいるといえよう。

3．ミルズの動機論における他者論へ向けて

3-1 ミルズの動機論とミードの思想

以上で、ミードの社会心理学について述べた。ミードは、他者との相互行為によって、自己はその行為を決めることができるという視点を示した。だが、その視点は、ミルズの議論に具体的にどのように反映されているのだろうか。

ミルズの初期論文におけるミードの影響を特に表すものとして、「一般化された他者」（generalized other）がある。ミードは「コミュニティのすべての成員が同意するような態度」[19] と述べる。このことを踏まえて、ミルズもまた、「一般化された他者」を「思考する人が会話する内面的な聴衆であり、また行為と経験を含む社会的な場で見られる態度を集約し抽象化した組織」[20] とする。また先に挙げたアブラフィアは、「一般化された他者は、個々人がいわゆる下位集団を超え、そして抽象度が『高度な』水準に統合された自己、社会全体あるいは世界共同体で普及している規範に基づく自己を

持つことを可能にするのである」[21] と述べる。この「一般化された他者」の視点によって、個々人は、自らの行為を決める際に、自己の規範意識に基づいて適切な行為をすることができる。いわば「一般化された他者」とは、規範に基づいた行為をするための、社会が用意した他者のイメージという枠組みである。このような枠組みに基づくことで、個々人はその社会の規範に即した行為ができるのである。

このようなミードの議論を踏まえて、ミルズは動機という個々人の行為を統制する枠組みの存在にふれる。ミルズによると動機とは、言葉にされた行為の理由(reason)である[22]。動機とは、行為が「なされた」原因を探る根拠ではない。というのもの、ある行為がなされた根拠となる原因は、個人の心や欲求という観測不能のものを探る必要があるため、憶測の域を超えないからである。むしろ、動機は歴史的社会的に構築されており、人びとが社会的に振る舞う基盤を作るものである。ミルズは「動機は、個人の『内部に』固着した要素でなく、社会的行為によるその行動の解釈をおしすすめる条件なのである」[23] と述べる。ここで「内部」とは心の動きのことである。行為の理由を内部の心の動きのみで考えるのではなく、行為者自身による、言語化された枠組みに基づいた理由づけから理解するというのがミルズの基本的な考え方である。このことは、先述したミードによる生理的心理学と社会心理学の区別と対応している。ここで社会心理学とは、他者との関わりの中から、自己の思考や行為のあり方を説明しようとするもののことである。

> 動機をもって行為の主体的「源泉」と理解しようとする推論的な見方とは対照的に、動機というものは、ひとつの限られた社会的状況のなかで、さまざまの事実を確定させる機能を持つ象徴的な語彙であると考えられることもできよう。行為者としての人間は、言葉のやりとりを通じて、動機を自己と他者とに帰属させる。[24]

ここで重要なのは、自己は、他者との間で共有されている理由からその行為を決めるという考えである。このことについて井上は、「動機のボキャブラリーは、G.H.ミードのいう『一般化された他者』の構成要素となり、『行為者によって先どりされる他者の判断』として私たちの行為を方向づける機能を果たす」[25] と述べる。ミルズにとって動機とは、個々人の心にある、観測不能なものではない。むしろミルズにとって動機とは、行為を個人間の言語や規範などの理由づけという、観測可能で、解釈可能なものから理解されるのである。それゆえ動機とは、個々人の心を推し量る手がかりとい

うよりは、個々人がいかに他者と共有された理由をもって相互行為しているかを解明するための手がかりなのである。

先行研究で取り上げたヒューイットは、内部的なものと外部的なものの二つの関係を、「動機」と「動機づけ」(motivation)の違いから説明する。ヒューイットは、「動機づけの構想はミードの“I”の概念に精巧化されており、“me”との関係を見なければならない」[26] と述べている。「動機づけ」とは、「前意識のレベルを操作し、動機づけは衝動を決定するが、全ての行為(act)をそうするわけではない」[27] ものである。それに対して「動機」とは、「人々が、衝動を形成するような力についてよりも、行為(conduct)について言うことを言及する」[28] ものである。ヒューイットの説明に基づけば、「動機づけ」は、ある行為のあり方を決める前に他者から受け取った反応、すなわち内部的な要素である。その反応に基づいて、「動機」によって、他者への応答として、個人の行為のあり方が理由づけられるのである。すなわち「動機」とは、外部的なものである。ミードの“I”と“me”の概念は、動機というものから説明されると、規範等の言語化され、他者と共有した枠組みからの理由づけという見方から解することができるのである。

3-2 動機論からの「他者とともに生きること」へ

ミルズの動機論とは、他者との相互行為のための理由づけという考えがあることがわかった。では、ミルズはなぜその動機論で他者との相互行為という側面を強調したのであろうか。

そのことについて、シンボリック相互行為論の立場に立つアンセルム・ストラウスの言葉を見てみよう。ストラウスは、「社会化の環境において知覚や判断をするようになり、また、自分の正当化に対する他者の評価を考慮にいれなければならないため、公的な表明と指摘な表明には通常は食い違いがない」[29] と述べる。ここで重要なことは、個々人の思考や行為には、必ず他者の存在が想定されているということである。他者がいることで、個々人は適切な行為を行う必要が生じる。それゆえ、個々人は、適切な行為を選ぶために、あるいは他者と円滑に相互行為するために、動機を用いるのである。

だが、この動機の理解では、ともすれば動機が個々人の行為を拘束しているとも見えてしまう。動機論の再評価をいち早く行った社会学者であるネルソン・フットは、「彼ら(ミルズら初期の動機論の研究者、筆者注)の分析は動機という言語に機能への注意を呼び起こしたが、しかし読者に、言葉と行動の間にある分析されていないすき間、

または言語が動機づけという事実どのようなことをするのかについての謎といった不満足な感覚を残したままになっている」[30] と述べる。フットの述べるように、ミルズの動機論は、なぜ動機が行為を導くのかが、一見すると不明瞭である。その結果、動機とは個々人が行為する際に、その行為のあり方を制約してしまう、呪いのようなものであると思われかねない。

では、ミルズの動機論は、社会学の発展期における古典的な研究としての価値しか有しないのであろうか。ここで重要になるのが、ミードの思想の意味である。

ミルズとミードは、自己という問題を論じる中で、当時の社会的状況を参照していた。ミードの思想の研究者である徳川直人は、ミードによる社会実践への態度を参照する。徳川によるとミードは、当時の労働闘争に対して、お互いが妥協しない態度を批判している[31]。ミードは、自己の利益や正しさ、そして立場に疑いを持たない人々を批判した。自己の利益、正しさ、そして立場、すなわち自己のあり方は、そもそも他者との関わりの中で考えなければ、その意味を持ちえない。他者のことを考え、他者とともに生きることなしに、その意味はないのである。

それゆえミードは、「具体的な対象を持ち、耳をすませ、目をみはり、手や足を動かして、調べ、測ったり比べたり、文や絵に表現し、報告し、話し合ってみたり。そんな活動として精神・自我・理性を、ミードは有機体が社会的に営む生命活動として捉え直そうとした」[32] のである。このことをミードは以下のように表している。

> 倫理的目的は基本的に社会的な性格をもつと考えられるので、道徳的内省においては、次のような対立が生じていることが見られる。すなわち、一定の価値は、古い自我、ないしは古い自我の支配的な部分のうちに代弁者を有し、他方、それに対抗して、別の傾向や衝動に対応する別の価値が生じてきて、その立場を主張する別の代弁者を立てるようになるという対立である。古い自我が表す価値に、その場を委ねてしまうことが、まさしく利己的と呼ばれる事柄である。そこにおいて、注意は、対象によって喚起されるのではなく、感情的な反応と古い自我とが結びついている主観的な領域へと向けられる。その結果、自分とは対立する他者の目的を、他者の主観的な観点からとらえてしまうのである。その結果、自分とは対立する他者の目的を、他者の主観的な観点からとらえてしまい、道徳的問題は、自分か他者かどちらかが犠牲になるものだと思うようになってしまうのである。

しかし、その対立は社会的なものではあるけれども、問題を客観的に考察するならば、それは自我の間の戦いではなく、状況の再構成に向かうべきものとなる。そこにおいて、これまでのものとは異なる、より大きな、より適切な人格が現れてくるようになる。注意は、客観的な社会的領域に向けられるべきことになる。[33]

ここでミードは、他者の存在が道徳的な行為を導く可能性について述べている。自己は、他者の期待に応えることで成り立つ。その意味で他者とは、自己がどのように振る舞うべきかを考えるための、まずもって想定される人物である。ミードの自己論を研究するドミトリ・N・シャリンは、「他者との相互行為の結果として得られた自己とは、個人が首尾一貫した、意味のある全体として自身を捉えることに対する確固とした背景を提供する、総合した社会的行為を反映する」[34] と述べる。ミードにとって自己とは、他者とともに生きるなかでこそはじめて存在しえるものである。それは、他者を省みることがなくなった時代への危機意識でもあり、その時代を再構築する必要があると語るのである。ミードは、自己が他者の存在を想定し行為するという道徳のあり方を示そうとしたのである

このようなミードの学説に呼応して、ミルズも自身の問題意識に共有している。その問題意識とは、「動機」が揺らいでいる状況下のことである。

「混交する動機」や「動機づけの葛藤」の背後にあるのは、競合的な、あるいは、矛盾する状況的パターンと、それぞれの動機の語彙である。変わりやすく、ひずみの入っている状況においては、いくつかの選択的行為が、それぞれ、自らに適合する動機を有する異質な行為体系に属しているだろう。このような葛藤は、マージナルな人びとのなかで重なり合っている、いろいろな語彙のパターンを表明しているのであって、状況のまっただなかでは容易に区別されない。[35]

先にも述べたように、ミルズにとって「動機」とは、他者との相互行為を成り立たせるものである。この「動機」は同時に、個々人が行為をする際に、他者との関わりについての指針、あるいは規範ともなる。ミルズは「ソクラテス時代以来、多くの『動機づけの理論』が倫理的・宗教的な教説と結びついてきたことは、意味のあることである」[36] と述べる。ミルズは、「当時のアメリカ社会が『禁欲的な動機の語彙』から『快楽主義的』(hedonistic)な動機の語彙への変遷」[37] を問題視していた。それは、他者との関わ

りが、他者とともに生きるという事実、すなわち道徳的意識から乖離しているからである。ミルズにとって、動機による「行為の制約」とは、個々人の行為から自由を奪うといったものではない。むしろ、動機による「行為の制約」とは、ある行為が道徳に適うこと、あるいは個々人が道徳に敵う行為を選ぶということを可能にするのである。いわばミルズは、個々人が道徳的に行為するという世界を再構築しようとしていたのである。社会学者の片桐雅隆は、「個人誌的な動機の付与や、未来に向けて動機を語ることは、相互行為を規範的に達成していく働きをもっている」[38] と述べる。ミルズの動機論とは、自己が行為するための準拠枠組みとしての動機を、道徳的な意味づけをするためのものとして再構築することを目指したものである。

ミードは、自己のあり方を再構成するということに、道徳的な意味を見出した。これを引き継いでミルズは、自己を構成するための「動機」が、いかに道徳的に再構成されるべきかを模索した。この意味で、ミードとミルズは、他者とともに生きるための基盤を再構築しようと考えていた点で、共通点が見られるのである。

4．おわりに

ミルズは、ミードの思想から動機論を構築した。ミルズの動機論は、自己の行為を社会秩序に適うものにするための準拠枠組みであると見られてきた。そこでミードの思想は、自己の構築のされ方の基本的な考え方を提供したという程度に見られていなかった。だが、ミルズにとってミードの意味とは、それだけにとどまらないものである。ミルズにとってミードの思想とは、自己と他者とがともに生きるための言葉づくり、対話の場づくりの基本的な考えを提供するものなのである。ミルズのミード思想の受容は、社会学的分析枠組みを提供する以上の意味を有していたといえよう。

---

[1] Randall Stokes, John P. Hewitt, “Aligning Actions”, *American Sociological Review*, 41(5), p.838.

[2] John I. Kitsuse, Malcolm Spector, *Constructing Social Problems*, Benjamin Cummings Publish Company, 1977, p.92. J・I・キツセ、M・B・スペクター著、村上直之他訳『社会問題の構築: ラベリング理論をこえて』マルジュ社、1990年、145頁。

[3] 井上俊「動機のボキャブラリー : C. W. ミルズ『状況化された行為と動機の語彙』」、井上俊、伊藤公雄編『自己・他者・関係』世界思想社、2008年、14頁。
筆者は、“interaction”、“interactionism”等の言葉を、引用中の文を除いて、現在の研究動向を踏まえて「相互行為」「相互行為論」と訳している。引用中に「相互作用」「相互作用論」等の言葉がある場合は、以上の英単語が踏まえられている。

[4] Charles Wright Mills, “Situated Action and Vocabularies of Motive”, Irving Louis Horowitz eds., *Power, Politics, People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 1963, p.452. 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」、青井和夫、本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年、355頁。

[5] 井上俊「日常生活における解釈の問題」、井上俊『遊びの思想』、世界思想社、1977年、216頁。

[6] Cheryl A. Albas, Daniel C. Albas, “Motives”, Larry T. Reynolds, Nancy J. Herman-Kinney, *Handbook of Symbolic Interactionism*, Altamira Press, 2003, p.352.

[7] Irving Louis Horowitz, *C. Wright Mills: An American Utopian*, The Free Press, 1983, p.29.

[8] Ibid.

[9] Mead, “Social Psychology as Counterpart of Physiological Psychology”, Andrew j. Reck eds., *G. H. Mead: Selected Writings*, The Bobbs-Merrill, 1964, p.103.（加藤一己・宝月誠訳『G. H. ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房、2003年、15頁。）
初出は、Psychological Bulletin, vol.7, 1909, pp.401-408である。

[10] Gray Cook, *George Herbert Mead: The Making of a Social Pragmatist*, University of Illinois Press, 1993, p.80.

[11] Charles Wright Mills, “Language, Logic, and Culture”, Irving Louis Horowitz eds. *Power, Politics,* People: The Collected Essays of C. Wright Mills, Oxford University Press, 1963, p.426. 佐野勝隆訳「言語・論理・文化」、青井和夫、本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年336頁。

[12] George Herbert Mead, “The Social Self”, Andrew j. Reck eds., G. H. Mead: *Selected Writings*, The Bobbs-Merrill, 1964, p.144.（船津護・徳川直人訳「社会的自我」、『社会的自我』、恒星社厚生閣、1991年、4頁）
初出は、*The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods, vol.10*, 1913, pp.142-149である。

[13] Ibid., p.143.（邦訳書、3頁）

[14] Mitchell Aboulafia, “introduction”, Mitchell Aboulafia eds., *Philosophy, Social Theory, And the Thought of George Herbert Mead*, State University of New York Press, 1991, p.9.

[15] Mead, “Social Psychology as Counterpart of Physiological Psychology”, p.103,104.（邦訳書、15、16頁）

[16] 船津、1983年、51頁。

[17] Mead, ”Social Psychology as Counterpart of Physiological Psychology”, p.104.（邦訳書、16頁。）

[18] Charles Wright Mills, “Situated Action and Vocabularies of Motive”, Irving Louis Horowitz eds., *Power, Politics, People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 1963, p.442. 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」、青井和夫、本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年、347頁。

[19] George Herbert Mead, “The Genesis of the Self and Social Control ”, Andrew J. Reck eds., *G. H Mead: Selected Writings*, The Bobbs-Merrill, 1964, p.284.（船津護・徳川直人訳「」、『社会的自我』、恒0星社厚生閣、1991年、59頁）
初出は、International Journal of Ethics, vol.35, 1924-1925, pp.251-257である。

[20] Mills, “Language, Logic, and Culture”, p.426.（邦訳書336頁。）

[21] Mitchell Aboulafia, “introduction”, 1991, p.7.

[22] このことについては、拙稿「A・ストラウスのミルズ動機論への再評価: 他者によるアイデンティティ変容へ向けて」（日本デューイ学会編『日本デューイ学会紀要』第58号）を参照のこと。

[23] Mills, “Language, Logic, and Culture”, p.426.（邦訳書336頁。）

[24] Mills, , “Situated Action and Vocabularies of Motive”, 1963, p.440.（邦訳書344頁。）

[25] 井上俊「動機のボキャブラリー C. W. ミルズ『状況下された行為と動機の語彙』」井上俊、伊藤 公雄編

『社会学ベーシック1 自己・他者・関係』、世界思想社、2008年、16頁。

[26] John Hewitt, *Self and Society: A Symbolic Interactionist Social Psychology (5th edition)*, Allyn and Bacon, 1991, p.133.

[27] Hewitt, *Ibid*.

[28] Hewitt, *Ibid*., p.134.

[29] Anselm Strauss, *Mirrors and Masks: The Search for Identity*, Free Press, 1959, p.54.（片桐雅隆訳『鏡と仮面: アイデンティティの社会心理学』世界思想社、2001年、67頁。）

[30] Nelson Foote, "Identification as the Basis for a Theory of Motivation", *American Sociological Review*, vol.16(1), 1951, p.14.
本論文では、"motivation"と"motive"を使い分けているが、先のストラウスとフットはミルズの論文を"motivation"の文脈で論じているので、本論文では彼らの論文をミルズの"motivation"の文脈で用いている。

[31] 徳川直人『G・H・ミードの社会理論: 再帰的な市民実践に向けて』東北大学出版会、2006年、187頁。

[32] 同上書、194頁。

[33] George Herbert Mead, "The Social Self", 1964, p.148.（邦訳書12,13頁。）

[34] Dmitri N. Shalin, "The Romantic Antecedents of Meadian Social Psychology", *Symbolic Interaction*, vol.7(1), 1984, p.52.

[35] Mills, , "Situated Action and Vocabularies of Motive", 1963, p.450.（邦訳書354頁。）

[36] Ibid. p.451.（邦訳書354頁）

[37] 片桐雅隆『自己と「語り」の社会学: 構築主義的展開』世界思想社、2000年、90頁。

[38] 同上書、90頁。ここで示されている「個人誌」とは、個々人の体験を言語化し、再構成された人生についての語りのことである。